かも
市史だより

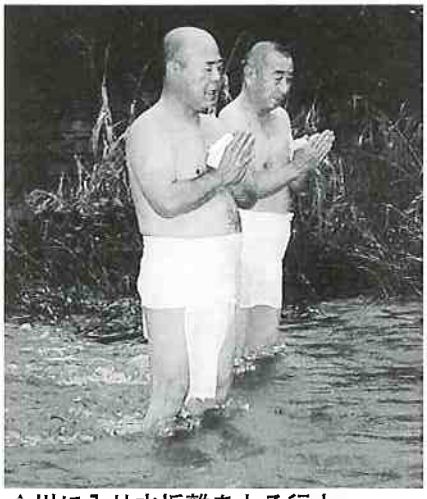
平成19年3月
No.15

■編集発行　加茂市幸町2丁目3番5号　加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

下黒水の「寒倉講（かなくらこう）」

▲水垢離の間、川岸で念仏を唱える（平成18年12月23日撮影）

▲水垢離の後、祭壇の前で念仏を唱える



▲川に入り水垢離をとる行人

「寒倉講」は、寒倉大権現を信仰する講集団で、新潟県東北部、五頭山山麓から加茂市にかけての集落に講の存在が確認されています。一般には、カナクラ様ともカノクラ様とも呼称され、文字に表すときは神庫・神倉・寒倉と地域によって様々ですが、七谷地区では寒倉と表記され、カナクラ様と呼ばれています。

寒倉講は、寒中に修行をし、昼夜に念仏を唱えてムラの内外をまわり、葬式には寒倉講の長念仏を唱え死者を弔い、申し出があれば病人などの祈祷をし、疫災が入らないようにムラの境や家の出入り口に寒倉大権現のお札をはり、除災のためのミチキリをしました。黒水地区の寒倉講も、新暦一二月一八日から二四日までの一週間宿に籠り、川で水垢離をとるという寒行を昭和三三年（一九五八）まで続けてきました。

しかし現在は、一二月二三日に講中が集まり、水垢離をとり、祭壇に寒倉様の掛け軸をかけ、鉦を叩きながら念仏・和讃を唱え、ミチキリをして終了します。

新潟県の寒念仏講のほとんどが消滅している中で、途絶えることなく講を継承している下黒水の寒倉講は貴重な存在です。（民俗部会　岩野笙子）

青海荘の上条と下条

中世の初期から末期まで、現在の加茂市や田上町の付近に青海荘と呼ばれる荘園がありました。この荘園では現在と同じ地名がいくつも使われていました。

青海荘の地名

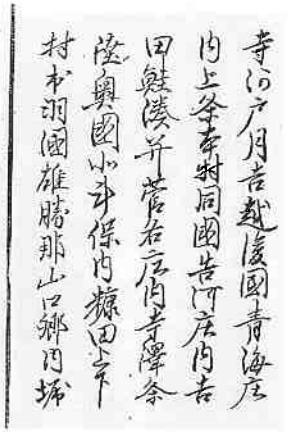
青海荘が初めて史料に出てくるのは文治二年（一一八六）です。領主は高松院つまり鳥羽上皇の第四皇女にあたる妹子だと記されています。そんなことから、当時すでに高松院は亡くなっていましたが、青海荘は鳥羽上皇の院政時代（一一二九～一一五六）に設定された荘園ではないかと考えられています。

しかしその後、荘園制度が終わるまでの約四〇〇年間、青海荘の領主権が誰にどう受けつがれたか、ほとんどわかっていません。ただ、青海荘は設定されたあと、開発の進展にともなって現地を管理する権利がいくつかの地域に分割され、それらを武士たちが分け持っていった気配があります。そうしたこともあって、青海荘のなかの地名がいくつか伝えられています（別表参照）。

それらの地名のなかには、最初から青海荘にふくまれていた地域の地名と、開発の進展によってあとから青海荘と呼ばれるようになった地域の地名が混じっている可能性があります。また、それらはたまたま残っている史料に出てくるものなので、実際にはもっとさまざまな地名があったと思われます。しかし、残された地名をみるかぎり、青海荘は現在の加茂市から田上町の南部に中心があったように思います。

青海荘のなかの地名…典拠欄の号数は『加茂市史』資料編１の史料番号

年代(西暦)	青海荘のなかの地名	現在地(推定)	典拠
文永8年(1271)	青海荘内曽禰新保・白山権現	?	71号
建武3年(1336)	青海荘内上条本村	加茂市上条	77号
15世紀末～16世紀初	青海荘上条口	〃 〃	111号
文和4年(1355)	青海荘賀茂口陣峰	〃 〃 陣ケ峰	83号
永和5年(1379)	青海荘長福寺(＝寺院名)	〃 下条長福寺	93号
15世紀末～16世紀初	同荘(青海荘)下条	〃 〃	111号
15世紀末～16世紀初	青海荘山之内条	〃 七谷(?)	111号
文永8年(1271)	青海荘垣生田村(埴生田村)	田上町羽生田	70号
嘉元2年(1304)	あふミのしやうは□うた	〃 〃	75号
15世紀末～16世紀初	同荘(青海荘)坂田条	〃 坂田	111号
15世紀末～16世紀初	同荘(青海荘)河骨川条	〃 河船川	111号
永正2年(1515)	あふミの荘ノ内田上ノ郷	〃 田上	119号
15世紀末～16世紀初	同荘(青海荘)井栗条	三条市井栗	111号
15世紀末～16世紀初	同荘(青海荘)蓑口条	旧白根市蓑口	111号
15世紀末～16世紀初	同荘(青海荘)小吉之条	旧中之口村小吉	111号



▶ **建武三年（一三三六）足利尊氏下知状**「越後国青海庄内上条本村」の地名がみえる（金沢市立玉川図書館所蔵）

上条と下条

青海荘の地名のうち、現在も加茂市の大字として使われている上条や下条は、ほかの荘園でもよく見かける地名です。なかには上条や下条のほかに中条もあったり、東条や南条など東西南北の下に条をつけた地名もあります。

青海荘の場合、建武三年（一三三六）に上条本村、一五世紀の末に上条口の例が出てきます。これによって青海荘の上条には複数の村があったことがわかります。そのなかで上条本村と呼ばれた村は上条で最も中心的な村だったのではないかと思います。また、下条が初めて史料にでてくるのは一五世紀の末ですが、上条本村が出てくる建武三年にはすでに下条もあった可能性があります。

ところで、青海荘の地名のうち、埴生田（羽生田）村、坂田条、河骨（舟）川条などは、もともと現地にあった地名だと思いますが、上条や下条は荘園が設定されてからつけられた地名だと思います。それにしても、なぜ、もともとあった地名を使わないで、わざわざ上条とか下条という符号的な地名をつけたのでしょうか。こういう符号的な地名は、ど

ういう場合に、荘園のなかのどういう場所につけられたのでしょうか。それがわかれば、青海荘の成り立ちがもう少しわかるような気がします。

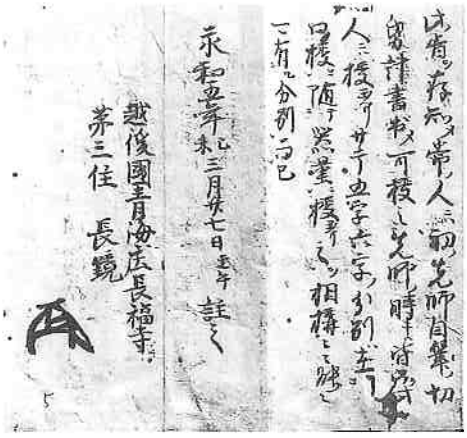
上条と下条の基準

それから、青海荘の上条と下条には不思議な点があります。ほかの荘園の上条や下条は、大体、河川の上流部に上条があり、下流部に下条があります。ところが青海荘では、現在の上条と下条の位置を参考にすると、なぜか、荘園年貢の輸送に大きな役割を果たしたと思われる信濃川の上流部とつながる地域を下条、下流部とつながる地域を上条と名づけています。

この点について、加茂川の中流域に広がる青海荘のうち、より上流部を上条、平野部を下条と呼んだのだとする説があります。加茂川に着目する点でとても魅力的な説ですが、何かしっくりしない面もあります。少なくとも現在の河道でみる限り、上条と下条は加茂川の上流部と下流部の関係ではありませんし、青海荘の下条は平野部だけでなく、長福寺地区や上下条地区など下条川の上～中流域もふくんでいた可能性があるからです。

いったい青海荘の上条と下条はどういう経過のなかで上と下が決められたのでしょうか。この謎が解けたら、青海荘だけでなく、加茂市全体の古代史や中世史が、もっとはっきりみえてくるかもしれません。

▲ **文永8年（1271）関東引付勘文** 石河荘と青海荘で御神体の帰趨を争った訴訟文書（名古屋市蓬左文庫所蔵）



▶ **「青海庄長福寺」とみえる永和五年（一三七九）の文書**（千葉県匝瑳〈ふっさ〉市 長徳寺所蔵）

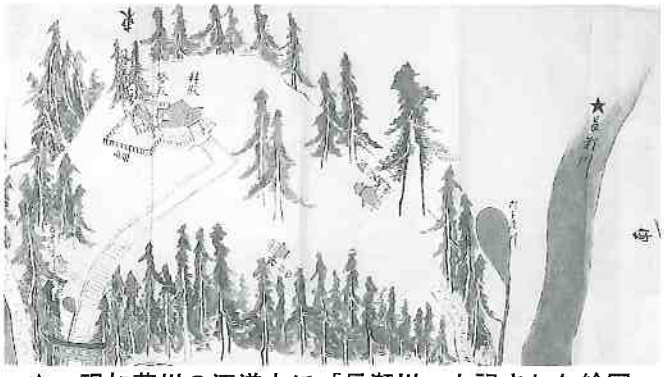
加茂川と下条川

それからもう一つ。現在、大字下条を流れる川は下条川、大字上条に沿って流れる川は加茂川と呼ばれています。加茂大明神（＝加茂神社）の前を流れる川だから、あるいは「賀茂之御神領（＝石河荘）」に沿って流れる川だから、これを加茂川と呼んだのは当然と言えば当然ですが、賀茂之御神領に住んでいた人々だけでなく、まだ青海荘がはっきりと命脈をたもっていた時代に青海荘の上条で暮らしていた人々も、やはり、この川を加茂川と呼んだのでしょうか。

上条の長瀬神社には加茂川を長瀬川と記した年代不明の絵図が所蔵されていますが、それ以前に加茂川を上条川と呼んだ人々はいなかったのでしょうか。また、下条川はずっと下条川と呼ばれてきたのでしょうか。二つの川の古代や中世の河道の復元とともに、その名称も大いに気になるところです。

古代史や中世史は史料が乏しいために、あれこれ考えると、考えたことが次々に謎になってしまいます。中世末期の文禄四年（一五九五）の検地帳に出てくる地名もほとんど場所が分かっていません。「今は誰も使わないが、古い地名や言い伝えを聞いたことがある」そんな情報がありましたら、ぜひお教えください。そのなかに古代や中世の謎を解くカギがあるかもしれません。

（考古・古代・中世部会 桑原正史）



▲ **現加茂川の河道上に「長瀬川」と記された絵図**（八幡 小池清彦氏所蔵）

かも私史

消える信仰
―西山の寒倉講―

若宮町
中野政平

十年一昔という。歳月人を待たずとも。今を去る七十年前の村の信仰について書き残しておきたい。

寒村を訪れると、村の外れにたいてい寒倉大権現・庚申塔という石の塔があった。村の外から悪い病や災難が村々に入って来ないようにとの信仰であった。西山では秋の稲刈りも済み、晩秋になって時折霰の降る頃、新米を石臼で挽き、新藁のツッツコに粉と水を練ったカラッコという団子を入れ、朝に寒倉様と庚申塚に備える。恙無く秋の稔りを終えた事の感謝と、新しい年を無事に迎えられる様にとの信仰であった。

◀「寒倉大権現之印」

昭和十年十一月
寒倉供養塔寄附帳
講者一同

▶ **寒倉講中の寄附帳**　供養塔の建立にあたり募った浄財の記録簿

今と違い深い雪の中、大寒を迎えると寒倉様を信仰する寒倉講中の古老達が、積もった雪を踏み分けて、藁・菅笠の出で立ちで行者の姿になって、鐘（鉦）を叩きながら村の地蔵尊・寒倉大権現・庚申様の順に、とっぷり暮れた村々を念仏を唱えながら巡った。子供心に恐い様な異様の気持ちで、鐘の音が遠のくのを待った。鐘は四つ位あった。左手に鐘をひもでぶら下げて、右手に持つT字型の槌（撞木）で叩き、念仏は哀愁と物悲しい様を帯び、荘厳で、十三仏様の御名を呼び唱えながら、ひたすら雪道を歩く。トーユという、和紙に黒い油を塗った雨具を着る人も稀にいた。歩くたびにトーユの擦り合う音がガサガサ聞こえた。大寒の期間中に寒修行を希望する人は、講中の宿に寝泊りして身を清め俗を離れ、ひたすら菩薩様に近づいた心になって荒行をする。願掛けの心の内は妻子にも話さず、満願の日は村を流れる雪に埋もれた川に下帯一本の丸裸になり、水は膝まで浸る水量で、身を切る程の冷水を手桶で頭から被り水行が始まる。寒い雪道に村人や幼い子供まで見に来る。講中の親方が川の中の行者に、見物衆の捧げた水を読みあげると、その度毎に手桶に水を汲んで頭から被るのだ。行者に水を捧げる人は、願いが叶う様に心願の協力をするのである。宿の家から甘酒が雪道に運ばれて来て、子供はもとより老若男女に振る舞った。身も凍る様な寒さに、熱い甘酒は美味しかった。

▲ **西山の寒倉供養塔**　大正8年（1920）建立と刻まれる

私が八、九歳の時だから、大人に聞いた話でなく覚束ない記憶を辿りながら綴ってみた。それが最後で、日中戦争や激動の世の中に移り、今は知る人も二、三人残っているのみ。

あの哀愁に満ちた、もの悲しい旋律、荘厳な長念仏も、今は絶えて仕舞った。誰も唱える人はいない。鐘だけが念仏衆の鐘、寒倉講中の鐘として残っている。村に他界した人が出ると、村念仏といって、寒倉講中・念仏衆の人達が集い生仏に一晩長い時間をかけて念仏を唱えた。飾られた祭壇に百匁ローソクが灯されて、ゆらゆらと立ち昇る赤い灯のなか、念仏を唱える人の声明と鐘の音のみが響く。仏に縁のある人が幾度も水を捧げる荘厳な儀式であった。今は簡素化されて皆葬儀場で行なわれる

ようになり、昔を語る縁もなく、ブロンズの鐘だけが幾百年も伝承されていくだろう。

（昭和二年四月六日生、
平成一五年三月二一日記、故人）

※ 本稿は、西山出身の筆者が生前書き残した追憶の記を、一部表現を改め掲載したものである。

▼ 寒倉講の鉦とT字型の撞木
鉦の一点に天保一三年（一八四二）の、撞木三点にはそれぞれ明治～大正時代の年号が記される。

加茂松坂に魅せられた私

寿町 島田正作

私が加茂松坂を覚えたのは、戦時中一八、九歳のころ「割烹よろづや」主の亀山一郎さんが吹き込んだレコードを買い求めたのがきっかけだ。だから私は亀山さん流の歌い方である。私はよろづやさんのところへ仕事に行き亀山さんとめぐり合い、親父さんの節で自分なりに覚えたのが始まりというわけである。

昭和三一年（一九五六）二月二六日、若宮中学校の体育館竣工を記念してNHKの「素人のど自慢」が開催されたとき、出場して鐘三つ鳴らし、宮田輝アナウンサーと加茂のことの話をしたのが良い思い出であり、記念となっている。

十二月十日 映写器購入
P.T.A特別会計十六万五千円を以て新浜市新浜視覚教材株式会社より北辰SC～一〇三型トーキー映写器を購入する。
二月二十六日 第九回NHKのど自慢新浜県決勝大会が体育館で開催さる。天氣快晴 白銀の若宮の丘三千名の人垣を造る。
三月二十日 第一回卒業式挙行
創立多難の一ヶ年間校風樹立に努力した第一回の開拓者三百余名は数々の感激を胸に抱いて雄々しくも社会に巣立つた。

▲ NHKのど自慢開催を記録する昭和30年度の『若宮中学校沿革史』

▲ 亀山一郎氏（芸名清）吹き込みによるレコード（昭和11年録音、青海町 亀山忠氏所蔵）

その頃盆踊りは矢立の人たちが主だった。だから盆になると矢立の諸先輩と一緒に櫓の上で歌った。櫓は穀町と五番町がそれぞれ設けた。商店街の人たちが建てたものだったろうと思うが、あのころは協会も保存会もなくて、誰でも櫓の上で歌うことができた。代わりに責任の所在はあいまいで、今となっては確かなことはわからない。お囃子にはドラム缶と太鼓を用い、それに音頭取りが二～三人いて、櫓へは全部で五～六人が登った。昔は三味線は盆踊りでもなかなか上がらなかった。戦前櫓へ上がったのはもっぱら男衆だったが、戦後根古屋の大関家のおばあちゃんが、五番町の櫓の上で女性として初めて歌った。穀町は芸者衆も歌っていたが櫓には上がらなかった。

自分は加茂松坂が好きだったから、盆になると妻の実家に行くが、顔だけ出して夜になると帰ってきて櫓に上がって歌ったものだ。娯楽も少なかったので、盆内くらいは松坂で楽しんだ。

加茂の盆踊りは、踊りをみるのなら穀町が一番で、人間をみるのなら五番町が良かった。踊りが本当に好きな連中は道半まで行き、朝方、空が白々してくるまで踊ったものだ。叩くものがないから川原から缶がらを拾ってきて太鼓がわりに叩いて踊った。もっとも夜を忘れて踊りあかすもいいが、明るくなるときまりが悪くなる。男の連中が化粧をして女子ショの襦袢を着て踊っていたものだから。だから帰りは人に見られまいと町の中は通らず道半から若宮へ登り、若宮からお宮山を経て今の葵中学校の裏から降りて岡ノ町へ帰ってきた思い出がある。

（大正一四年一月一一日生）

七谷地区神社建築の造形美

―上土倉十二神社を中心に―

平成一二年、下高柳日吉神社本殿に出会いました（『かも市史だより』第三号参照）。一間社流造の小規模な社ですが骨格は太く、かつ大きく軒を広げ、流れるような曲線を駆使し、その姿は実に端正で完成度の高さを窺わせておりました。棟札も発見され、寛延二年（一七四九）に建築されたと判りました。さて、今回はまったく異なる上土倉の十二神社を紹介します。

この拝殿には当初祭神が祀られていましたが、安政四年（一八五七）に本殿が増設された際そちらへ移され、あらためて拝殿として位置付けられました。その痕跡が拝殿最奥中央間に残されています。現拝殿の屋根は昭和戦前期に全面的に取り替えられ、当初の形状とは異なっておりますが、外観の手法は本格的で、二重軒や斗組、向拝まわり等は充実しています。推測ですが、当初屋根は平入り入母屋造、向拝は現存する蟇股より唐破風であったと思われます。内部は折上げ格天井、断面の大きい虹梁が配され、力強い空間が表現されています。何よりも特徴的なのは内外に施された渦巻き模様や彫刻が華麗で、かつ力強く、江戸期によくみられる崩れがありません。このような演出による内外観は濃密で、社殿というよりもお堂と呼ぶ方がふさわしく、魔力さえ感じ取られます。この二つの社の異なる意匠表現の水準は高く、改めて七谷地方が持つ底力をみる思いです。

（文化財部会　山崎完一）

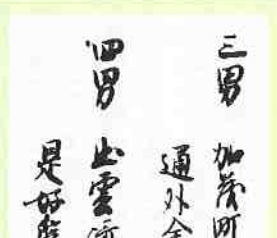
◀ 上土倉の十二神社外観

▶ 十二神社拝殿の回廊（左）と向拝

良寛の曾祖父は加茂中澤家から

系図、それはその家の歴代を記し、地域史を解明していく上で有効な史料にもなります。

今から約二三〇年前の「中澤家書上帳」によれば、同家はもともと加茂町に居住し、享保年間（一七一六～三六）に紫雲寺潟の開発に従事しました。その開発後、跡を婿に任せて加茂へ戻り、宝暦三年（一七五三）ころ、上条村名主になった歴代を記しています。



▶ 左が出雲崎の橘家を継いだ中澤家四男（若宮町　中澤眞氏所蔵）

同家七代目中澤太郎左衛門は幕府巡見使の宿を勤めた加茂町の商人でありました。太郎左衛門は四人兄弟で、三人目の弟は、「出雲崎橘左門家督相続ス、是好院松冷浄空居士、宝暦十一巳年七月十一日没」とあります。出雲崎町の橘屋と言えば、良寛の生家でこの時代の当主は左門を名乗り、良寛の曾祖父に当たる人です。その人が加茂町中澤家から入ったというのです。法号や没年は、「山本氏近世歴代家譜」と一致しています。良寛の曾祖父が加茂からの入婿だったことは、まだあまり知られておりませんが、系図からこんな発見もありました。

（近世部会　関　正平）

編集後記

今号も歴史・民俗・文化財と多岐にわたる記事をお届けすることができました。奇しくも巻頭と四頁に寒倉講の記事が並びましたが、二本を併読すると深い感慨を覚えます。